



校長室だより 6号

中 島 悟

【今週の行事】 4月25日(日) 平成22年度PTA総会
26日(月) 第5回閉校行事等実行委員会
28日(水) 遠足(韓国岳登山)雨天順延

【部活動関係紹介】 卓 球 部

- | | | | |
|---|-----|-------|-----------|
| 1 | 旧顧問 | 出野 武正 | 20周年記念誌より |
| 2 | 旧顧問 | 鶴ヶ野 勉 | 20周年記念誌より |

卓 球 部 (原文) 旧顧問 出 野 武 正

卓球部は本校の創立以来存在し、その当時は体育部は陸上部、バレーボール部、ソフトボール部そして卓球部の4部のみにて、文化部も新聞部、珠算部、美術部、生花部の4部のみという状態にて、わが卓球部は極めて本校では伝統ある部の一つである。初代の顧問は鶴ヶ野勉先生で昭和48年度より平野昭彦先生が加わっておられ、昭和47・48年に県大会にて団体2位となる輝やかな記録が残っている。その後の部顧問として黒木慎一郎先生、川路律子先生、岩切美知子先生、田中保光先生、西園隆弘先生、大崎美和子先生、工藤公洋先生、杉尾美紀子先生、弓削満先生、三宅守先生そして出野と多くの先生方のご指導がなされてきたのですが、現在は残念ながら男子卓球部が欠員のため存在せず、女子部員のみにて成績も団体戦は地区大会優勝、県大会ベスト8程度にて個人戦も3回から4回戦どまりという状態で低迷しているが、20周年を期に小野部長のもと新入部員も含めて、新しい顧問の熱心なご指導をうけ皆んな一生懸命にて日々の練習に励み、高校総体では良い成績をあげようと努力しています。

卓 球 部 (原文) 旧顧問 鶴ヶ野 勉

創立から4年間、卓球部の顧問をした。当時県卓球協会の常任理事をしている頃で、最も卓球に熱中した時期だった。

開校の年の4月、さっそく部員を募集した。男子は川越、四本、村角の3人。女子は中村、池田、川田、河野、安藤、亀高、奥田の7人が集まり、この10人は3年までやめなかった。「草創期の生徒会」でも書いたが、学校には部の用具は一切なかったので部員をひきつれては日南高校、日南工業、日南商業(今の学園)へと練習に渡り歩いた。5月の中ごろ、念願の台を2台購入してもらった時、部員たちと軽トラックから荷降しして3階の大教室へ運び上げ、そこで初練習した時の感激をなつかしく思い出す。

練習は日曜、祭日を問わず毎日することにし、たとえば遠足の日も学校へ帰ってからやった。中学時代に「ピンポン」しかなかった生徒にはずいぶんきつかったかもしれない。2週間後にインターハイに出場したが、1回戦でその年ベスト4に残った延学に当たって、大敗した。1年生だけのチームなので負けるのは当然であって悔しくはなかった。私の卓球はもともと「守り」が中心で、チームの中には必ずカットマンを作ることにし、川田、安藤、村角をカットマンに育てることにした。カットマンを作れば攻撃型の生徒も必然的に強くなるからだが、はじめ生徒は「守り」は地味だといっていやがった。実際はカットマンを育てるのはペンホルダーよりも手間ひまのかかることで、生徒の性格面まで触れなくてはならない。攻撃されても攻撃されても我慢よく、ていねいにボールを拾うことに専念させた。

秋の新人戦でベスト4になり、シード校になった。1年生だけのチームとして注目されたが、まだまだ不満足でさらに練習にはげんだ。早朝と昼時間にサーブの練習を入れ、

基礎体力の増強のため3kmほどのランニングを取り入れた。ランニングといえば、練習を終えて生徒が帰宅する時困ることがあった。当時はまだ学校から橋までの間に街灯がついていなかったし、夕方に痴漢が出ることだった。校門を出て車の前照灯で前方を照らし、その中で生徒を走らせた。曲がり角がきたらそこまで車を進めて、また前方を照らして走らせ、人家のある橋の所まで送りとどけた。

2年目に入り男子に崎田、黒木、石山、谷口が、女子に上園、松浦、橋口が入部した。台をあと1台入れて3台にした。人数が多くなったので部内のリーグ戦を何回もくり返し、負者にはウサギ飛びを命じた。夏のインターハイで女子が2位、男子が8位になった。この年から毎年総体、新人戦、春の大会ではほとんど2位であり、九州大会には出場したが2位から抜けられず、1位はいつも都城商業高校であった。世界の卓球界は中国を中心に動いていたし、中国の卓球は前陣速攻型で、都商はすでにこの戦法を取り入れていた。それに都商は鹿児島県の南之郷中学校からの越境入学生が中心メンバーであって、彼らは全国大会で優勝するだけの力をもっていた。

3年目になって男子に清武、船井、女子に岩田、外山、時任、田村が入部した。わが「純粋な日南勢」はくる日もくる日も練習し、戦法も少しずつ前陣速攻型へと変貌した。

いろいろの九州大会で一番の好成績はベスト8であった。力に差があるとは思わなかったが、貫録負けという印象で、15から20ポイントへくると何故かばん回された。私は吾田中、油津中、飲肥中、東郷中などを回って部員を探したが、これはいいと思った生徒は他の高校へ入学してガッカリした。その年の3月、第1回目の卒業生が出た。卒業式は非常に感動的なもので、ほとんどの生徒が泣いた。卒業生の部員を集めてミーティングを開き、1年から3年まで全ての試合で書いた試合の反省文を生徒に返した。この反省文は私のいる間つづいたが、技術面だけでなく精神面の向上がその反省文でよく読みとれた。

4年目になって男子に若松、大岩根、女子に池田、黒岩、山口が入部した。そして翌年の3月下旬、春の九州大会が佐賀県の嬉野市で開かれたが期日が国鉄のストライキと重なり、着いた時には団体戦は終わっていた。しょんぼりして帰るとそれ以上にびっくりした。私の転勤（宮崎南高校）が待っていた。戸村、福島が新部員として入り、戦力アップになるとよろこんでいる矢先だった。生徒たちは別れを惜しんで泣いてくれた。

新居が見つからず1ヶ月間、日南から宮崎まで通勤していると、ある日家へ遊びにきた部員の一人が、「ずっと家が見つからないといいのに」と言ったのが忘れられない。そう言ったのがYという2年の女子部員で、私は振徳商高を思い出すたびに彼女のことを考えてしまう。その年の総体前の頃、私が新任校で授業をしていると急用の電話が入った。例のYの父親からで、「娘が卓球の先生に会いたいとウワゴトを言うので、ぜひ会って下さい」と言った。私は愕然とした。新入部員の頃、彼女はゼンソク気味でありそのことでよく休んだが、身体を鍛えるためにこそ卓球を始めたのであった。さっそく県立病院へ直行したが、病室に着いた時にはもう彼女の意識はなかった。父母や部員に見守られて、Yは昏々と眠っていた。父親が、「卓球の先生に会いたがりましてねえ」とくり返した。意識が混濁すると「ファイト、ファイト」とか、「バン回」などと口走ったという。私は泣くにも泣けず、廊下に出た。

私は本校での4年間、卓球は教えなかった。卓球で教えられたと思っている。卓球を通して悲しみや、苦しみや、喜びや、感動を部員が学びとっていたら、それでもう十分であった。あれから20年たった今でも、あの同じ3階の大教室でたくさんのYたちが懸命に小さな白球を追っているだろうと思えば胸があつくなる。